「豊かな社会生活を送るために」
～コミュニケーション能力を高めるための取組～

高　等　部

1　はじめに

平成25年度、高等部３年の女子生徒Ａは、聴覚障害があることに加え一人学級や校内の女子生徒が少ない学習環境などにより、自分の気持ちや意見を伝えたり表現したりすることが苦手であった。しかし、高校卒業後は多くの人とともに社会生活を送ることになる。そのため、コミュニケーション能力を高めることによって、自信を持って人と関わっていけるようになってほしいと考えた。周囲と積極的に関わり心豊かな社会生活が送れることを目指してこのテーマを設定した。なお、Ａの卒業後の平成26年度は高等部に在籍する生徒がいないため、平成25年度の取組を報告する。

2　研究の目標

新学習指導要領では、言語能力の育成を重視しており、各教科の指導においても言語活動が大切であるとされている。生徒Ａにおいても、言語活動の充実がコミュニケーション力の向上につながるはずである。そのために、まずは各教科、ホームルーム、自立活動等さまざまな場面で、口話、筆談、スピーチ、プレゼンテーションなどの言語活動を行う。それらの活動を基にコミュニケーションや自己表現の方法を学び、活用していくことで実践力を養い、総合的なコミュニケーション力の向上を目指したい。また、人との関わりやコミュニケーションを通して相手の気持ちを考えることや周囲の人を大切にできるような心の成長も目標とした。

3　研究の内容及び実際

(1) ホームルームにおける取組

ア　スピーチ練習

毎週１回ショートスピーチを行い、その内容を細かく振り返った。繰り返すことで分かりやすく伝える意識が高まり、ゆっくり話す、メリハリのある手話表現をする、表情を豊かにするなどの成長が見られ、自分の言葉で考えながら話す姿勢が定着してきた。

スピーチのテーマ例

・３年生になって	・社会人として大切なこと	・遠足の思い出
・社会人として大切なこと	・うわろうピックを終えて	・１学期を振り返って
・就職試験に臨む	・就職試験を終えて	・中間考査
・学習発表会を終えて	・全聾陸上に向けて	・全聾陸上を終えて
・アビリンピックへ出発	・アビリンピックを終えて①②	・２学期の反省
・新年の目標	・新生徒会長への激励	・卒業を迎えて　など

イ　面接練習

就職試験の面接練習を行った。会場への出入りや話し方、服装の与える印象の大切さについても触れ、日頃からの姿勢が大切であることを認識させた。筆談を依頼する練習も行った。

実際の面接当日は緊張したそうだが、練習したことが実践できたようである。就職試験の合格は、生徒にとって大きな自信になった。

ウ　口頭での伝達

週１回、手話を用いず口頭だけで連絡事項を伝達した。要点は理解していたものの、聞き返しによる確認はあまりなかった。本当に必要な情報であれば確認するべきであるが、ほとんど聞き返しがなかったことから、普段から会話の多くを聞き流していると思われる。

エ　クラス通信の発行

最近のニュース、話題の出来事、社会常識、担任が伝えたい思いなどをクラス通信として発行した。前年度との２年間で387号にわたるクラス通信を読むことは、何かを感じたり考えたりするきっかけとなり、そこから自分なりの意見を持つこともできた。

オ　進路のための学習

障害理解を深める学習を行った。学習を重ねることで自分の障害についてよく理解できた。コミュニケーションの際に依頼すべき支援を適切に伝えたり、自分が話の内容を理解しているかどうかを相手に伝えたり、自分の理解が正しいか確認することなども学習した。コミュニケーションのすれ違いをなくすためにも、今後の継続的な実践が望まれる。

カ　先輩から学ぶ

(ｱ) 就労体験への参加

８月に、就職を希望している会社で就労体験を行った。実際に仕事を体験し、製造の仕事が自分に適していると感じたことで、就職を決意するに至る良い経験となった。また、その職場で働く聴覚障害のある先輩方から、仕事の様子や生活面での大切な情報を多く得ることができた。具体的な体験談を聞くことで、就職に向けて前向きな気持ちになることができた。

工場での就労体験

(ｲ) 進路学習会での講演

卒業も間近の２月に卒業生が来校し、講演会を行った。仕事をする上で大切なこと、学生時代に頑張っておくべきこと、社会人になって今思うことなど、本校生徒にさまざまなメッセージを発信していただいた。Ａにとって一つ一つが心に響き、社会人としての決意を新たにすることができた。

卒業生による講演

(2) 自立活動における取組

ア　筆談練習

(ｱ) 筆談ツール

筆談に使える道具を紹介し、使いやすいものを自分で選ぶよう指示した。また、道具がない場合の空書や携帯電話使用などでの対処法も学んだ。スマートフォンでアプリケーションをダウンロードして使用すると便利である。本人は今後その形で筆談ツールを利用しようと考えている。

筆談ツールとして紹介したもの

・紙と鉛筆　　・マグネット式筆談器
・電子メモパッド　　・Ｎｕボード
・メモレ・かきポン・iPadなど
・アプリケーション（筆談パット、ＵＤ手書き、ＵＤトークなど）

(ｲ) 筆談の実践

「短い言葉で簡潔に書く。」「読みやすい字で書く。」「難しい言葉は易しく簡単な表現に書き換える」「ＴＰＯに応じた筆談方法を取る。」という四点に注意して実践練習を行った。テーマを決めたり、自由に筆談したり、ゲームを活用したりした。Ａは言語力や情報理解力に長けており、内容が十分伝わる筆談ができた。練習を通して徐々に工夫が見られるようになった。記号や矢印などを用いて時間短縮を図ったり、応答の際にアイコンタクトなどを取り入れることで、口話と同じような気持ちの伝え方ができたりする場面もあった。

タブレット端末の活用

イ　要約筆記・メモ練習

情報を取捨選択する練習をした。Ａは重要な部分を見極める力が高く、要点を手短にまとめることができたが、メモを取ること自体は習慣化しなかった。情報整理能力が高く、必要性を感じていないためと思われる。また、練習だからという軽い気持ちがあるのも否めない。しかし社会に出たらメモを取る習慣は大切になる。常にメモを携帯し、必要な時にいつでも活用できるようにしたい。

ウ　発音練習

自分の苦手な音を自覚し、伝わりにくい部分を筆談等で補う練習を中心に行った。音声認識チェックの結果、認識しにくい音は「カ」行、「サ」行、「イ」段の音であった。かなり多くの音が正確に発音できてないことになる。自分の発音の傾向を理解し、苦手な音を意識して発音すること、伝わらなかった場合に速やかに他の方法で伝えることが大切だということを学習した。

(3) 各教科における取組

ア　国語科における取組

(ｱ) 調べ学習

情報を見極めて整理する能力と表現力を身に付けることを目標とし、調べ学習を行った。

２年次当初は調べた部分を転記するだけであったが、情報の信頼性について学習した後は、正確性を確認するようになった。また、再調査や情報の取捨選択を継続指導するうち情報の選択が上手になり、写真、絵、図などを用いて見やすく工夫することができるようになった。声の大きさ、抑揚、間、しぐさなど、発表の仕方も徐々に改善されてきた。実践を重ねるごとに内容も深まり、質問に対してもすぐに答えらえるようになった。

３年次に取り組んだ「中島敦」の調べ学習は人物の多面性が興味深かったようで、理解も深まり、まとめも工夫されていた。最後の感想に、「いろいろな作家や作品を調べて、分かったことがたくさんあり、楽しく本が読めるようになった。」とあり、成長が伺えた。

２年次の調べ学習テーマ
「秦の始皇帝」「兼好法師」「中原中也」「夏目漱石」
「芥川龍之介」「レヴィナス」「清少納言」「石川啄木」「森鴎外」
３年次の調べ学習テーマ
「伊勢物語」「中島敦」

(ｲ) 言葉での事象説明

ある事象について自分の言葉で相手に分かりやすく説明する方法を学んだ。写真を見れば分かることも、会話の場合には言葉で伝える必要がある。身の回りの持ち物、人の服装、部屋の間取りなどを言葉で説明したり、説明を元に絵を描いてみたりすることで伝わり方を確認した。

(ｳ) プレゼンテーション

好きなものの魅力を伝えるというテーマで「犬」についてプレゼンテーションを行った。見やすさ、話し方などを工夫し、犬が好きという気持ちを十分に伝えることができた。

(ｴ) 曖昧表現の確認

語順によって印象が変わったり、場面によって意味が変わるなど、何通りにもとれる曖昧な表現について学習した。「〇〇だけど△△」と「△△だけど〇〇」の印象の違い、「時計持ってる？」が時計の有無を聞くのではなく時間を知りたい場合にも使われることなどに気付き、自分が伝える場合の参考とした。

ウ　社会科における取組

(ｱ) 音読の実践

誤読を知ることを目的として実践した。サ行や拗音に間違いがあり、正しい読み方を指文字や板書で伝えた。難しい語句は、読み方のほか、意味が理解できるような視覚的資料を提示したり、一つ一つの漢字の意味を理解させイメージを持たせた。

(ｲ) 口問口答による授業内容の確認

授業内容を理解しているかどうかを確認するためにいった。考えをまとめて話すまでに少し時間が掛かるが、答ええ方から、内容を理解できていることが分かった。

(ｳ) ノート整理

要点を理解しているかどうかを確認するために行った。重要部分の理解はできており、赤で記入したり傍線を引いたりしてまとめられていた。活動を繰り返す中で、最初は丸写しだった文章が少しずつ整理され、要点が正確にまとめられるようになった。

(ｴ) 授業の感想まとめ

自分の考えを書き言葉で表現することを目的として行った。自己の体験と結び付けて考えられるものは、思いを込め、よく考えて文を書くことができた。しかし、イメージが湧きにくいものは、単文や日常会話文程度の語句で書かれていることが多かった。

(ｵ) 聴覚口話でのコミュニケーション

口頭で話す場合、分からない時に自分から質問する姿勢を養うことを目的として行った。Ａは、普段から聴覚口話の習慣が身に付いているが、手話を使わずに授業を行うと、教員の口元を見る真剣なまなざしが多くなった。「分からないのでもう一度言ってください。」という質問もできるようになった。

(ｶ) 課題追求学習としての調べ学習

「秘密保護法」について調べてまとめた。資料を完全に理解することは困難であったが、問題点等については直接的な体験と関連付けて書かれており、概要を理解した上で、自らの意見を適切に発表することができた。今後も新聞、テレビ、パソコン等で情報を得たいという感想が得られた。

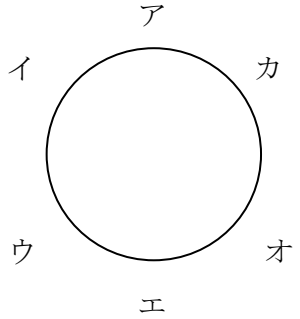
エ　数学科における取組

ＳＰＩ問題集を用いて、「推論」や「資料整理」などの文章から必要な情報を読み取り、考えを述べる活動を行った。週２回、授業の20分間で実践した。

ＳＰＩの問題例

Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆの６人が円形のテーブルに座ることになった。座る場所の希望を聞いたら、次のことが分かった。

Ａ「１番先にエに座らせてほしい」
Ｂ「ＦとＥの間に座りたい」
Ｃ「私はどこでもいい」
Ｄ「Ａの隣は嫌だ」
Ｅ「Ｄの左隣がいい」
Ｆ「Ｄの真正面に座りたい」



Ｃの座る場所はどこか。

数学的な知識や考え方を使ったり、工夫したりすることが大変苦手で、始めは全くできなかった。しかし、ヒントを与えて１つの問題を説明した後、類似問題に取り組ませると、同様の考え方を使って解ける問題が多くなり、説明もできるようになった。説明も、言葉だけでなく図や表を使って工夫することができた。

Ａも、教科書では使わない考え方や工夫ができて、慣れると考えるのが楽になったという感想を述べている。

多くの生徒が、公式を用いず工夫して考える文章問題は苦手である。生徒の力に合った問題を選び、解き方や考え方となるモデルを示して練習することによって考えるコツが身に付くのではないかと思われる。また、反復練習することで説明する態度や分かりやすく表現する力の向上も期待できる。

オ　英語科における取組

(ｱ) 英語スピーチへの挑戦

Ａは、１年次に愛媛県高校生英語スピーチコンテストに出場しており、この経験が伝えることへの苦手意識を克服する大きな契機となった。それを踏まえ、３年次にも２回、校内で英語スピーチを行った。

英語独特の言い回しを学び、間の取り方、抑揚についても意識して練習した。発表では、気持ちが聞き手に伝わり、ＡＬＴの先生にも高評価をいただいた。言語が違っても、気持ちを込めて表現することの大切さは同じであることを実感することができた。

(ｲ) 英語による文通体験

カナダの大学生と手紙のやりとりを行った。日本語の手紙を読み、日本語で返事を書き、英語も添えた。相手の言いたいことを読み取り、返事は平易な日本語に置き換えて書くことを意識し、漢字には振り仮名を振った。また、ニュアンスが伝わりにくい言葉は詳しく表現するよう助言した。相手のことを考えながら、文字で伝える方法について学ぶ良い機会になった。

カ　家庭科における取組

(ｱ) 幼稚部との交流活動

「発達と保育」では、幼児の心身の発達を学習する目的で、生徒が考えた遊びを通して本校幼稚部５歳児との交流活動を年２回行っている。１回目の交流学習では教師側がテーマを提示し、生徒に交流内容を考えさせた。幼児の知的発達を促すため、体全体を使いダンス要素も取り入れたリズミカルな歌遊びや、折り紙を使っての活動などをして楽しんだ。

２回目の交流学習では、Ａ自身が「幼児の顔を見てゆっくり話す。」「幼児の表情を観察し、寄り添うように支援する。」という目標を設定し、活動内容を考えた。幼児が推理しやすいよう、教室にあるものをモチーフにした３ヒントゲームを発達段階に合わせて用意した。当日はテーマに合う衣装を着用して雰囲気を

盛り上げ、幼児と同じ目線で話すように努力している様子が見られた。幼児が理解できていないときには、口を大きく開けてはっきり話そうとしたり、手話や身振りを使ったりして積極的にコミュニケーションを取っていた。

交流活動の感想（一部抜粋）

今回のゲームは難しいかもしれないと不安でしたが、みんなに喜んでもらえたので、安心しました。子どもに目線を合わせて、分かりやすく伝えるよう工夫しました。子どもが私のほうを見ていないときは、必ず顔を見てからしゃべるように心掛けました。とても楽しい時間を過ごせました。

(ｲ) ファッションショー「ウワコレ」の実施

「服飾文化」の授業では、制作意欲の喚起を促す目的で、学習発表会時にファッションショー「ウワコレ」を開催し、自分で制作した作品をステージで披露している。意欲喚起の目的で始めた活動だが、自己表現力の向上にも効果が見られた。幼児との交流学習を通して、服を着ることで違う自分を出せることや周りの人たちも楽しませることができると分かり、構成や音楽を考える段階から、後輩への指導まで主体的に活動することができた。

自分が作った甚平を着て登場する際には「自分新発見、カワイアンガール」とユーモラスなタイトルを付け、大股で弾むように歩く、説明のときには観客からも意見を求める、ダンスを披露するなど見せ方に工夫を凝らし、観客と一体となった演出をすることができた。

また、司会進行では、モデルの登場が遅れたときに観客に手拍子を求めたり、セリフの間を取ってゆっくり話したり、リアクションを大きくしたりするなど、臨機応変な対応をすることができ、この学習活動を通して積極性の面でも成長が見られた。

学習発表会のファッションショー「ウワコレ」

キ　家庭情報処理における取組

適切なコミュニケーションは、一般常識の蓄積の上に成り立つと考え、授業開始前から約５分間の小テストを実施した。敬語問題、慣用句問題、よく似た日本語問題等を３～５択で提示した。また、「あなたならどうする。」という設問で、日常のある場面を設定し自分ならどう行動するかを記述式で回答させた。

記述問題では、正解を知らせた後に、より対処の難しい質問を１～２問出題して考えさせた。２年間継続して小テストを実施したなか、Ａは積極的に取り組むことができた。ただ、慣用句の意味問題はほぼ理解できたが、日常会話で使用すること

はほとんどなかった。よく似た日本語問題では一文字の違いによって意味が大きく異なることを理解し、文章を注意深く読み意味を正確に捉えようとする態度が見られた。

例題

①慣用句問題

体に関する慣用句の場合　「首を長くして待つ」「肩を落とす」等の意味

②よく似た日本語問題

「毎日書いていない」と「毎日書いて**は**いない」、「お花だけ**は**だめ」と「お花だけ**では**だめ」等の意味の違い

③「あなたならどうする」問題

病院に行ったが、医者が早口で何を言っているのか分からない。このような時どうするか。

(4) 学校行事における取組

ア　テーブルマナー講習会

一般常識として必須のフランス料理の作法について体験し、食文化への理解を深めることを目的として実施した。Aは専門家の説明を聞き、手順を見て模倣することでおおむね理解できていた。視覚情報が多かったこともあり、コミュニケーションは円滑であった。察しにくい話題もあったが、その際には聞き返すことができた。話し手の顔や動作を見てそれを素直に受け取る姿が印象的で、専門家からも「あなた（のマナー）は大丈夫ですよ。」と高評価をいただいた。

イ　交流活動

(ｱ) 人権のつどいへの参加

宇和高校の生徒と一緒に、「西予市人権のつどい」に手話コーラスで参加した。手話と音楽を合わせるのは難しかったようだが、練習を繰り返し、本番での発表は立派で感動的であった。毎年手話を熱心に学習している宇和高校の生徒と一緒に発表ができたことは、本人にとって貴重な経験であった。

(ｲ) 野村高校・宇和高校との交流

野村高校・宇和高校と交流活動を行った。25年度は本校が招待校だったため、交流の司会進行を本人に任せた。大きな声でゆっくりと伝えようという気持ちが出ており、内容は相手校の生徒にほぼ伝わったようである。自由に対話ができる活動では、互いに遠慮してなかなか話ができなかったが、時間の経過とともに少しずつ会話を楽しめるようになった。相手も一生懸命聞こうとしてくれたため、口話でのやりとりがおおむね成立した。もう少し積極的に話ができれば良かったという反省が出た。

交流活動

(5) 部活動における取組

高等部の陸上部員は生徒Ａ１名で、競争相手がいない状態で練習を行っていた。しかし、本人は各大会で活躍したいという高い目標を持っていたため、地域の高校と合同練習を実施し、普段はできない高いレベルでの練習を経験した。

競争意識を持って取り組むことで力を伸ばすとともに、他校の生徒とも交流し、コミュニケーション能力の向上を図る良い機会になった。Aは、最初は緊張して話ができるか不安だったが、大会の時に声を掛けられてうれしかったと述べている。実際の会話でも、ゆっくり話してもらうことでお互いの言葉が伝わり、良い交流ができたようである。健聴の人とどのように話せば良いか、自分なりに工夫する体験が何度もできたことは、卒業後に生かせると思う。また、合同練習の内容には、Aが実践しているメニューと同じものがあり、これまで取り組んできたことへの自信ができたとも述べている。

本校のような少人数の学校では、運動能力の向上や目標を達成し自信を持って生きる態度の育成のためにも、他校との練習は効果的であった。また、普段できない自由な交流の場は、生徒のコミュニケーション能力の向上につながり、将来の社会自立にも良い影響があると考えられる。

4　実践の成果と課題

高校卒業後、社会生活を送る上で、正確なコミュニケーションは必要不可欠である。相手の言いたいことを確実に読み取り、自分の言いたいことをしっかり伝えることができて初めて、対話の楽しさや心地良さを感じ、積極的に人と関わる姿勢が出てくるものと思われる。

卒業を間近に控えた生徒Aには、毎日の教育活動における言語活動を通してコミュニケーション能力の向上を図り、人と豊かな関わりが持てるような成長を目指して、様々な実践を行ってきた。約１年間の実践であったが、それぞれの場面で成長が見られた。また、今後の課題もいくつか見つかった。それらを以下にまとめてみたい。

生徒Aは、相手の表情や口元を読み取る口話を中心としたコミュニケーションにより、会話を行うことがおおむねできる生徒である。身近な人が相手であれば会話もしやすく、内容の類推も容易にできた。しかし、細かい話をするときや確実性が求められる職場等では、筆談やメモの使用が必須になると思われる。これまでの実践練習の成果として、まず書いて伝える力の向上が見られた。要点をまとめ、伝わりやすい言葉を選んで書くことが十分できるようになった。また、自分から聞こうとする姿勢が高まったことや伝え方に工夫が見られるようになったことも成果として挙げられる。今後は、口話に加え、書いて伝える方法も併用しながらより豊かなコミュニケーションが取れると考えている。

課題としては、会話の中で曖昧な部分があっても確認が十分出来ていないことが挙げられる。思い込みや勘違いなどを防ぐためにも、今後、確認する姿勢が必要だと感じる。

コミュニケーションは、ただ必要なことを伝え合うだけでは円滑に運ばない。相手の協力や配慮、また互いの人柄も大きな意味を持つ。したがって、自分の障害の状態を伝えること、困ったときに助けを求めること、相手の立場になって考えることも大切であり、その自覚と実践力を育てるための取り組みをしてきた。今回の研究を通して、Aにはどうすれば相手に気持ちが伝わるかを考え、相手の言いたいことを理解しようとする姿勢が育ってきたと感じる。プレゼンテーションや交流活動などにより、

これまでの自分の殻を破り、積極的に行動できる自分を発見することもあった。それらの経験を通して、人と関わりたいという気持ちが少しずつ芽生えているため、今後もその気持ちを大切にして、自ら会話に参加したり、集団の輪に入ったりして、主体的に人と関わってほしい。

小さな積み重ねではあったが、実践を行ってきたことで、本人の社会生活への気持ちが前向きになってきたと感じる。Ａは自分自身に挑戦したいという思いを抱いて就職していくことができた。社会に出ると、18年間慣れ親しんだ「聾学校」とは全く異なる環境の中で、自分の言いたいことが分かってもらえない辛さを身に染みて感じることもあるだろう。しかしながら、これまでの実践経験を通じてコミュニケーション力が向上しただけでなく、人間的な成長も多く見られたため、今後、しっかり人と向き合っていけると信じている。また、何事にも一生懸命取り組むＡの人柄から、周りには彼女のことを理解し助けてくれる人は多い。卒業後も、社会生活でどのようにコミュニケーションを行っていくかを考えながら、人との出会い一つ一つを大切にし、自分らしく豊かな社会生活を送っていけることを願う。

＊参考文献　脇中起余子「よく似た日本語とその手話表現」　北大路書房　2007
ＳＰＩ問題集